

〈研究ノート〉

ディベートにみられる終助詞「ね」「よ」「よね」の使用

— 日本語母語話者を対象に —

鄭 智 恵

キーワード：日本語母語話者、ディベート、終助詞、ね・よ・よね、ポライトネス・ストラテジー

はじめに

コミュニケーションは常に自分の立場表明を伴うものであり、その都度人間関係を調整するポライトネス・ストラテジーがあると考えられる。日本語において円滑なコミュニケーションを行う上終助詞の役割は大きい。双方意見の違うディベートの場の終助詞「ね」「よ」「よね」の使用実態を日本語母語話者を対象に調査し、「ね」が一番多く使われていたことがわかった。

1. 先行研究と研究課題

日本語の文末表現は「ポライトネス」とかかわる(大塚2000, 2003)。文末表現の「ね」「よ」「よね」の研究はいままで数多くなされてきた(白川1992, 田窪・金水1996, 宇佐美1997, 宮崎2000, 伊豆原1993, 2003等)。議論場面、反対意見の陳述にみられる終助詞の研究は李(2001)と大塚(2003)がある。しかし試合形式のディベートにおける終助詞の研究は管見の限り少ない。

本稿では、日本語母語話者を対象に試合形式のディベートにみられる終助詞「ね」「よ」「よね」の使用様態を明らかにしたい。

2. 調査資料

日本ディベート協会(JDA)主催第1回から第13回(1995-2007年)大会、15試合を無作為に選び、(<http://japan-debate-association.org/>実録・JDAディベート大会)ネット公表の文字化資料を分析した。

3. 結果と考察

3.1 全般の使用

終助詞「ね」「よ」「よね」の使用結果を図1に示した。「ね」(62.2%)がもっとも多く使われ、その次が「よね」(35.0%),「よ」(2.7%)であった。「ね」の多用によって、相手と異なる意見を

少しでも和らげて伝えようとの意図がみられる。鄭（2009）^(註)では、台湾人日本語学習者が一番多く使っている「よね」という結果と異なっていた。「ね」「よ」「よね」が、発話量（総モーラ数）に占める割合は1.2%である。

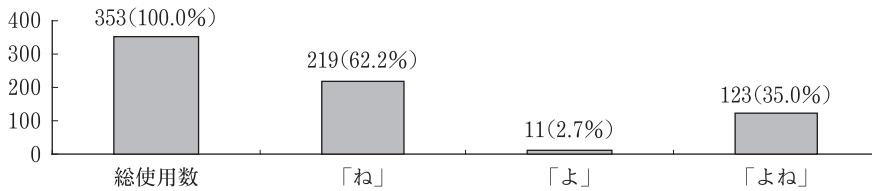


図1 使用頻度

3.2 質疑側（Questioner）と応答側（Respondent）

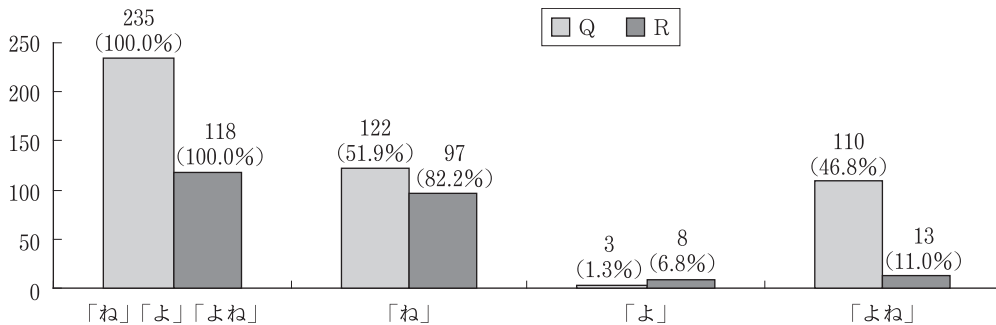


図2 質疑側と応答側の使用頻度

図2は質疑側（Questioner, 以下, Qと略す）と応答側（Respondent, 以下, Rと略す）の結果を示したものである。QはRの2倍弱であった。内訳をみると、「ね」の使用はQ, Rとも一番高く、とくにRは82%も占めている。「よね」はQが四割強であった。ちなみに、鄭（2009）^(註)の台湾人日本語学習者の結果では、Qは「よね」（107回）、Rは「ね」（13回）の使用が高かった。

4. ま と め

台湾人日本語学習者は「よね」を多く使い（鄭2009）^(註)、日本語母語話者は「ね」を多く使っていることがわかった。この結果を踏まえて、ディベートにおいて使用される「ね」と「よね」のコミュニケーション機能・使用効果に着眼し、今後の研究課題としたい。

（注）鄭智恵「直言表現にみられるポライトネス・ストラテジーの使用について——台湾大学生の日本語ディベートを例に」銘伝大学国際シンポジウム（2009.3発表予定）

謝 辞

本論文の執筆にあたり、JDA専務理事・立教大学松本茂教授からデータ使用許可をいただいた。この場を借りて深く御礼を申し上げたい。